

エゼキエル書8-9章 「神殿での偶像礼拝」

1A 大いなる忌み嫌うべきこと 8

1B 妬みの偶像 1-6

2B 隠れた行ない 7-13

3B タンムズと太陽 14-16

4B 神の憤り 17-18

2A 町の虐殺 9

1B 神殿にいる天使たち 1-2

2B 額の印 3-7

3B 惜しめない裁き 8-11

本文

エゼキエル書 8 章からです。私たちは、エゼキエル書全体の中でとても重要な箇所、分岐点になる箇所を読みます。それは、「神の栄光が神殿から去る」という出来事です。祭司であったエゼキエルにとって、神の聖所に仕えることが最大の関心事です。そこで何をしているかと言えば、主ご自身の栄光を仰ぎ見て、その中で礼拝することです。まさに、私たちが「選ばれた種族、王である祭司(1ペテロ 2:9)」とされており、私たちも礼拝することが、神に与えられた務めです。その中において、肝心の神ご自身の栄光が無くなったらどうなるのでしょうか？それは、とてつもなく悲しいことです。しかし、それを自ら願うことがあります。それはすなわち、「形としては神を敬っているが、心は他のことを慕っている」ということがあります。このような偽善によって、神の名が汚されてしまいます。神は聖なる方です。そのため、ご自分の聖なる名を守るために裁きが行われます。これは 8 章から 11 章までありますが、前半と後半に分けたいと思います。8 章と 9 章を学びます。

1A 大いなる忌み嫌うべきこと 8

1B 妬みの偶像 1-6

8:1 第六年の第六の月の五日、私が自分の家にすわっていて、ユダの長老たちも私の前にすわっていたとき、神である主の御手が私の上を下った。

「第六年の第六の月の五日」とは、エホヤキムがバビロンによって捕え移された時からのことです。エゼキエルもその時に捕え移され、他の捕囚の民と共にいます。先の預言は、「**第四の月の五日**」とありましたから、ちょうど 14 カ月前のことです。左脇に横になって 390 日、右脇に横になって 40 日、食べ物はパンを人の糞で焼き、水もごく少量を命じられました。そして髪の毛を鋭利な剣で剃り、それを三分の一に分ける預言も行ないました。ですから、4 章から 7 章までの預言を行なっていて、終わっていなかったと思います。そこに、彼がそのような預言を行なっているのを、長老たちが集まって、見ていたのではないかと思われます。彼が語っている時に、主の御手が彼の上

に置かれました。

8:2 私が見ると、火のように見える姿があった。その腰と見える所から下のほうは火で、その腰から上のほうは青銅の輝きのように輝いて見えた。

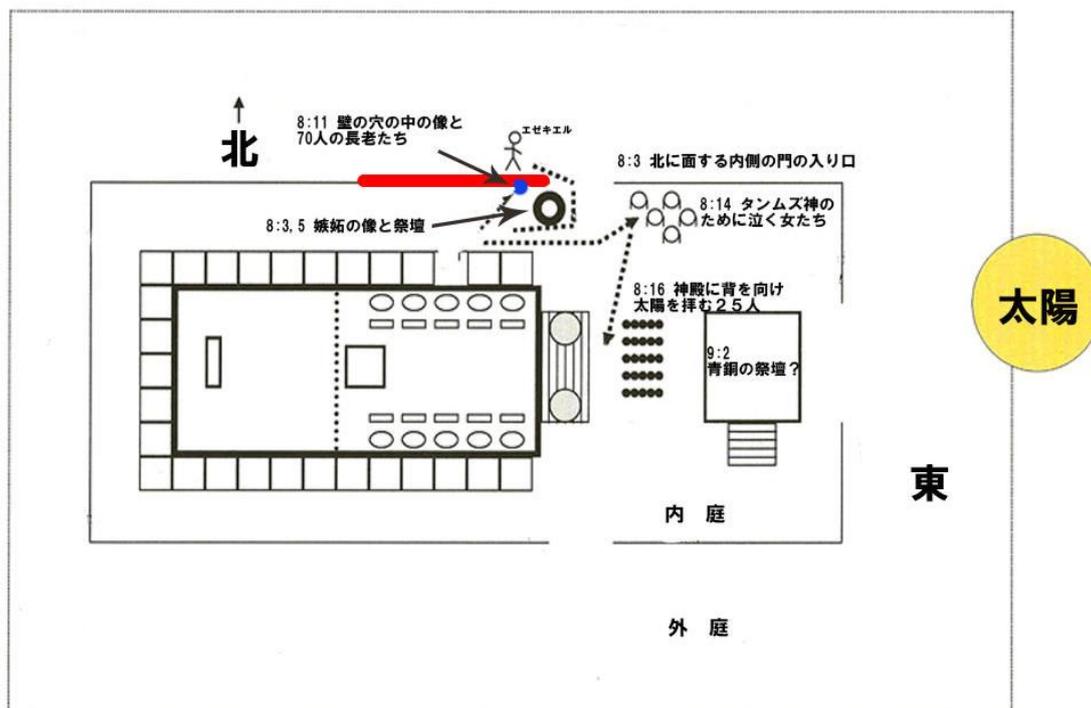
この方は、1章の最後に出て来た、ケルビムの上に座しておられる方、主ご自身です。「1:26-27 彼らの頭の上、大空のはるか上のほうには、サファイヤのような何か王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。私が見ると、その腰と見える所から上のほうは、その中と回りとが青銅のように輝き、火のように見えた。その腰と見える所から下のほうに、私は火のようなものを見た。その方の回りには輝きがあった。」とありました。私たちは黙示録の学びにおいて、イエス様の栄光の姿を1章で見ましたが、主イエス様ご自身の現れかもしれません。

8:3 すると、その方は手の形をしたものを伸ばし、私の髪の毛のふさをつかんだ。すると、霊が私を地と天との間に持ち上げ、神々しい幻のうちに私をエルサレムへ携え行き、ねたみを引き起こすねたみの偶像のある、北に面する内庭の門の入口に連れて行った。

「髪の毛のふさ」を掴んだということは、まだ彼が髪の毛を剣でそり落とすことを、主に5章で命じられていましたから、髪の毛がまだあるので、その前だったのかもかもしれません。霊が彼を持ちあげた、そしてあの1章にあった、神々しい幻のうちに彼がエルサレムに連れて行かれました。ここで、彼が肉体の中にあっただのか、それとも肉体から離れてだったのか、定かではありません。しかし彼の霊は確実に、エルサレムに動いたものと思われまます。霊が動くということは、さほど珍しいことではありません。パウロがコリント人への第一の手紙で、近親相姦の罪を犯している男について、「1コリント5:3-5 私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり…あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。」と言っています。体がなくても、霊によってコリントにまで行くことができました。それば物理的に移動していないかもしれない、霊においてですから、そうした空間はあまり意味をなさないのかもかもしれません。そして、彼は第三の天に引き上げられた時にこう言いました。「肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存知です。(2コリント12:2)」そして、もちろん黙示録においてヨハネが、御霊によって天に引き上げられているのが4章2節にあります。

そして、主は彼を、「北に面する内庭の門の入口に連れて行った」とあります。内庭の北からの入口からは、おそらく左手に祭壇が見えていることでしょう。そして、正面辺りに、神殿の本堂の敷居があったことでしょう。そして、右手に本堂すなわち聖所があったものと思われまます。そこから、これから三つの種類の人々が偶像礼拝をしている姿を見まます。

8:4 なんと、そこには、私がかつて谷間で見た姿と同じようなイスラエルの神の栄光があった。8:5 その方は私に仰せられた。「人の子よ。さあ、目を上げて北のほうを見よ。」そこで、私が目を上げて北のほうを見ると、北のほうの祭壇の門の入口にねたみの偶像があった。8:6 この方は私に仰せられた。「人の子よ。あなたは彼らのしていることが見えるか。イスラエルの家は、わたしの聖所から遠く離れようとして、ここで大きな忌みきらうべきことをしているではないか。あなたはなおまた、大きな忌みきらうべきことを見るだろう。」



1

エゼキエルは、「私がかつて谷間で見た姿と同じようなイスラエルの神の栄光があった。」と言っていますが、彼が谷間を歩いている時に、ケバル川のほとりで見た栄光のように、主の栄光が現われたと言っています(3:23)。

主は、この栄光をもって神殿に留まっておられたのです。しかし、ここの北の入口の前に、「妬みの偶像」がありました。なぜ、これが妬みなのか？主は、イスラエルの民にご自身だけへの愛を求めておられたからです。「申命 4:23-24 気をつけて、あなたがたの神、主があなたがたと結ばれた契約を忘れることのないようにしなさい。あなたの神、主の命令にそむいて、どんな形の彫像をも造ることのないようにしなさい。あなたの神、主は焼き尽くす火、ねたむ神だからである。」よく考えてみましょう、一人の男に妻がいます。一人の妻です。そしていつものように、夜、同じ布団で寝ようとしてました。すると、なんとそこに既に見知らぬ男が寝ていたのです。そして、妻はこの男と寝ると言い出し、あなたはもっと横で寝ていてください、と言われる。当然ながら、激しい妬みが起こります。

¹ http://livedoor.blogimg.jp/paster_t/imgs/f/2/f/289bdfc.jpg

パウロは、なんと教会にいる者たちの中に遊女と寝ている者たちがいて、こう言いました。「1コリント 6:15-17 あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。キリストのからだを取って遊女のからだとするのですか。そんなことは絶対に許されません。遊女と交われれば、一つからだになることを知らないのですか。「ふたりの者は一心同体となる。」と言われているからです。しかし、主と交われれば、一つ霊となるのです。」既にキリストと一つの霊にされているのが私たちです。キリスト以外のものに、自分の身、また心その女に捧げるのであれば、その女とキリストを一つにすることになります。今、話した、一つの寝台に自分の夫以外の男を寝かせることに等しいのです。こんなことはあってはいけない、だから「大きな忌みきらうべきこと」と言っています。

そして主はエゼキエルに、「イスラエルの家は、わたしの聖所から遠く離れようとして」いると言いました。そう、神殿の中にいるのですが、心は聖所から遠く離れようとしていました。もう一度思い出しましょう、主は聖霊によって、私たちをご自分の神殿にしておられます。「1コリント 3:16 あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」私たちが、主の栄光を見るということの目標から離れる時、そこには、妬みの偶像が、その他のもっと愛しているものがあるから、と言えかもしれません。これだけでも衝撃的ですが、さらに衝撃的なこと、忌まわしいことが待っています。

2B 隠れた行ない 7-13

8:7 それから、この方は私を庭の入口に連れて行った。私が見ると、壁に一つの穴があった。8:8 この方は私に仰せられた。「人の子よ。さあ、壁に穴をあけて通り抜けよ。」私が壁に穴をあけて通り抜けると、一つの入口があった。8:9 この方は私に仰せられた。「はいつて行き、彼らがそこでしている悪い忌みきらうべきことを見よ。」8:10 私がはいつて行って見ると、なんと、はうものや忌むべき獣のあらゆる像や、イスラエルの家のすべての偶像が、回りの壁一面に彫られていた。8:11 また、イスラエルの家の七十人の長老が、その前に立っており、その中にはシャファンの子ヤアザヌヤも立っていて、彼らはみなその手に香炉を持ち、その香の濃い雲が立ち上っていた。8:12 この方は私に仰せられた。「人の子よ。あなたは、イスラエルの家の長老たちがおのおの、暗い所、その石像の部屋で行なっていることを見たか。彼らは、『主は私たちを見ておられない。主はこの国を見捨てられた。』と言っている。」8:13 さらに、私に仰せられた。「あなたはなおまた、彼らが行なっている大きな忌みきらうべきことを見るだろう。」

午前礼拝でここを詳しく取り扱ったので、かいつまんでお話します。神殿の外からは見えないのですが、その壁の中に隠れた部屋があって、その壁には石像になっていて、はうものや忌むべき獣の像が掘られていましたが、イスラエルの民が拜んでいたあらゆる像がそこにありました。それは、霊的に忌むべきことだけでなく、人々の肉の欲望を、その貪りを異様な形にまで表現したものでありました。そして驚くべきは、「七十人の長老」がそこで香炉をもって香を焚いていたのです。出エジプト記において、指導者モーセを支えていた長老が七十人いました。イスラエルの王を

支える者たちとして、その代表者でありましょう。彼らが、主なる神に仕えることの模範にならなければいけないのに、なんと民と同じように、隠れたところでその霊的また肉的な貪りにふけっていたのです。これは、忌まわしいことです。信仰をもったばかりの者が不品行の罪を犯すのと、教会の指導者が犯しているのでは、その衝撃の度合いは大いに違います。

そして、スキャンダルは、「シャファンの子ヤアザヌヤ」がいるということです。なぜここで名指しされているかと言いますと、彼は敬虔な、主を恐れる父や兄弟たちに囲まれた家系だったからです。シャファンは、ヨシヤ王に対して、神殿で発見された律法の書を読んだ書記です。彼の子アヒカムは、殺されそうになったエレミヤを匿いました(エレミヤ 26:24)。他の息子、ゲマルヤはエレミヤの書記バルクが書き記した巻き物を、暖炉の中でちぎって燃やしていったのを、やめてくださいとお願いしました(36:12)。エルアサは、エレミヤの手紙をバビロンの捕囚の民に渡しにバビロンまで行った人です(29:3)。そして、シェファンの孫ゲダルヤが、エルサレムが滅ぼされた後に、バビロンによって総督に任じられた人です(39:14)。ですから、敬虔な人たちが勢揃いの家なのです。ところが、彼がその中にいました。なんで、こんなことになったか?「主が見ておられない、主が見捨てたから」という間違った神観が彼らにあったから、と午前礼拝で話しました。

ここには、偶像礼拝の悪化があります。入口に妬みの偶像を設けました。この妥協が、つまずきの石となりました。私たちの心に神より大切なものを置いた時に、それが躓きとなり、他の隠れた行ないへと至ります。主への敬いは形だけのものとなり、思いの中で、また人々のいないところで貪るのです。そして、「彼らが行なっている大きな忌みきらうべきことを見るだろう。」と主は案内されます。その妥協はさらに悪化の一途をたどります。

3B タンムズと太陽 14-16

8:14 ついでこの方は私を、主の宮の北の門の入口へ連れて行った。するとそこには、女たちがタンムズのために泣きながらすわっていた。8:15 この方は私に仰せられた。「人の子よ。これを見たであろうが、あなたはなおまた、これよりも大きな忌みきらうべきことを見るだろう。」

今度は、隠れたところで行なっていません。おおっぴろげに行なっています。女たちが、「タンムズ」を拝んでいます。タンムズはバビロンの神です。イシュタルという愛と性の女神の夫ということになっています。砂漠地方で、春に草木を生えさせる神とされており、夏になるとたちまち枯れてしまうため、タンムズが死に、陰府に下ったと考えるのです。それで、このことを女たちは夏になると悲しむ、ということです。そしてタンムズのために嘆くこの儀式が豊饒の儀式的な性的な行為と結びつけられ、これらのことが神殿のすぐそばで行われていたということになります。

カナン人の神々については、これまでイスラエルとユダの国が周囲にあるので、それを拝んだということは理解できるかもしれませんが。もちろん、それ自体も衝撃的なことですが、しかしなぜ、バビロンという遠い国にあるものを拝むのでしょうか?これはエゼキエル書を見ていくと次第に分か

りますが、彼らは主なる神に救いを求めるのではなく、外国の国々に救いを求め、強い国に求めたからです。その中で、彼らの拝んでいる神々にも引き寄せられ、自分たちの神殿に導入すれば、それでご利益が得られると思ったのでしょう。日本において、アメリカのハリウッド発の流行が入ってくるを考えれば、想像できるのではないのでしょうか。豊かで強い国にあるものなら、それを受け入れ、ますます罪の深みに入っていった、ということです。

8:16 そして、この方は私を主の宮の内庭に連れて行った。すると、主の宮の本堂の入口の玄関と祭壇との間に二十五人ばかりの人がおり、彼らは主の宮の本堂に背を向け、顔を東のほうに向けて、東のほうの太陽を拝んでいた。

これは究極の忌まわしさです。「本堂の入口の玄関と祭壇の間」ということは、祭司やレビ人たちであることは明らかです。交代制で神殿の奉仕につく祭司の家族が、24 人割り当てられていることが歴代誌第一 24 章に書かれています。さらに大祭司を加えると「二十五人」になります。そして彼らが、なんと「本堂に背を向け、顔を東のほうに向けて、東のほうの太陽を拝んでいた」とあります。主への礼拝を司る者たちが、なんと主に背を向けてしまったのです。

異教において、大抵、主要な神は太陽です。エジプトではラーという太陽神があります。だから当時の人々は、太陽が昇る方角、東を向いて礼拝していたのです。日本でも「日の出」を拝む習慣がありますが、それは、世界的にもそうなのです。そこで主なる神は、ご自分を礼拝する時に、その至聖所を西に置きました。東の門から入り、西に向かって祭壇、洗盤があり、そして幕屋の中の聖所、至聖所と、祭具が西に向かって一直線に並んでいます。これは、異教の神々から背を向けることによって、初めてまことの神である主に礼拝することができるように、主があえてその反対の方角をお決めになったのです。けれども、彼らは背教に陥りました。他の神々の方向と同じ東を向いて、文字通り背教、主なる神に背を向けたのです。

ユダの国が、バビロンにも初め頼ろうとして、それからバビロンが虐げ始めたので、今度はエジプトに頼ろうとしました。おそらく太陽神はそのエジプトの神ラーではないかと思います。それで、エジプトの神々にも引き寄せられたのでしょう。

4B 神の憤り 17-18

8:17 この方は私に仰せられた。「人の子よ。あなたはこれを見たか。ユダの家にとって、彼らがここでしているような忌みきらうべきことをするのは、ささいなことだろうか。彼らはこの地を暴虐で満たし、わたしの怒りをいっそう駆り立てている。見よ。彼らはぶどうのつるを自分たちの鼻にさせている。8:18 だから、わたしも憤って事を行なう。わたしは惜しまず、あわれまない。彼らがわたしの耳に大声で叫んでも、わたしは彼らの言うことを聞かない。」

主がエゼキエルに、しっかり考えてほしいと思っておられます。「ユダの家にとって、彼らがここで

しているような忌みきらうべきことをするのは、ささいなことだろうか。」と言われます。些細なことではありません、これはあまりにも深刻なことです。主は、忍耐深い方です。怒るに遅く、情け深い方です。罪を悔い改めるなら、今すぐにでも罪を全て赦される、憐れみに早い方です。しかし、それは神が裁かないことを意味しません。主の御怒りの時は定められており、怒りを下す時に、神が裁きを行なうのは不公正だと思われることはない、ということです。むしろ、なぜもっと早く裁かなかったのか、と思われるほど、神は忍耐されています。

ここにある、「彼らはぶどうのつるを自分たちの鼻にさしている。」という言葉があります。イザヤ書に、「17:10 あなたが救いの神を忘れてあなたの力の岩を覚えていなかったからだ。それで、あなたは好ましい植木を植え、他国のぶどうのつるをさす。」とあります。主ご自身の植木鉢で育つのではなく、外国の植木を自分で好き勝手に植えて、他国により頼み、他国の神々で育とうとしている、ということです。このイザヤの預言を、エゼキエルに対してはさらに、自分たちから他国のぶどうのつるを鼻に指している、と、先のタンムズや太陽神に向かって拝んでいる姿を言い表しています。そして、憤りをもってことを行ない、憐れまないとされていますが、それを 9 章で見ることとなります。

2A 町の虐殺 9

1B 神殿にいる天使たち 1-2

9:1 この方は私の耳に大声で叫んで仰せられた。「この町を罰する者たちよ。おのおの破壊する武器を手を持って近づいて来い。」9:2 見ると、六人の男が、おのおの打ちこわす武器を手を持って、北に面する上の門を通過してやって来た。もうひとりの人が亜麻布の衣を着、腰には書記の筆入れをつけて、彼らの中にいた。彼らはいって来て、青銅の祭壇のそばに立った。

主が神殿における裁きを取行されます。その時に主がお用いになるのは、天使です。六人の男がまずいます。彼らは武器を持っています。天使のイメージに彼らの姿が合わないかもしれませんが。けれども聖書では、天使が神の裁きを行うために武器を持つことは、数多く出て来ます。ケルビムは、エデンの園を守るために炎の剣を持っていました。出エジプトにおいて、主は、エジプトの家に入り、そこの初子をことごとく打ち殺して行きました。そしてイエス様は、ご自身を捕えに来る者たちに対して、ペテロが剣を取ったのですが、「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。(マタイ 26:52-53)」と、ローマ軍の六千人の編成「レギオン」の言葉が使われました。

彼らはもともと、門を守る門衛の働きをしていたかもしれません。新しいエルサレムの都の門は、御使いが門衛となっています。聖なる神がご臨在される神殿に人が入るのを見て、部外者、すなわち汚れた者が入らないように守っていたのかもしれませんが。しかし、今、神殿の中にこそ、その取り除くべき汚れがあります。それで、彼らは主に命じられて武器を持ったのでしよう。

そしてもう一人は、「もうひとりの人が亜麻布の衣を着、腰には書記の筆入れをつけて、彼らの中にいた。」とあります。亜麻布を身につけていますが、祭司のような服装です。そして、その白装束は、神の輝きと聖さを表しています。そして、書記の筆入れを身につけていますが、これは神殿の管理人としての働きを示しているでしょう。誰が神のものであるか、そうでないか、その登録をするための記録を取る、ということでしょう。神の書物には、いのちの書があり、そこに一人一人の名が書き記されています。だれが、神の栄光と聖さに預かっているのかどうか、登録されています。そして、彼らが青銅の祭壇のところに集まっていますが、そこは神の裁きのところを示していました。

2B 額の印 3-7

9:3 そのとき、ケルブの上にあったイスラエルの神の栄光が、ケルブから立ち上り、神殿の敷居へ向かった。それから、腰に書記の筆入れをつけ、亜麻布の衣を着ている者を呼び寄せて、9:4 主は彼にこう仰せられた。「町の中、エルサレムの中を行き巡り、この町で行なわれているすべての忌みきらうべきことのために嘆き、悲しんでいる人々の額にしるしをつけよ。」

「ケルブ」とありますが、これはケルビムの単数形です。ケルビムは四人いましたが、その一人の上にイスラエルの神の栄光がありました。至聖所から神の栄光が動き、神殿の敷居にまで来たのでしょう。そしてここから、神の栄光の離脱が起こります。10 章には敷居から出て、東向きの門に向かう主の栄光の姿があります。それから、東の門から東の山に行く様子が 11 章にあります。すなわち、主の栄光が神殿から去ったのです。その始まりです。

そして主がなされたことは、とても大切です。その書記の働きをしている天使に対して、主は、町の人々の一部に、その額に印をつけよ、と言われます。彼らは、「すべての忌みきらうべきことのために嘆き、悲しんでいる人々」です。不義のゆえに心を痛めている人々です。同じような人が、ソドムの町に住んでいました。ロトです。ペテロは手紙の中でこう言っています。「また、無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた義人ロトを救い出されました。というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。これらのことわかるように、主は、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、不義な者どもを、さばきの日まで、懲罰のもとに置くことを心得ておられるのです。(2ペテロ 2:7-9)」今、主はこれと同じことをエゼキエルの時のエルサレムの住民に対して行われています。忌まわしい偶像礼拝に対して、全ての人たちが喜んでいるわけではありません。悲しんで、嘆いている人たちもいます。私たちが、主の聖さによって悲しみ、嘆いている時、主は私たちに、同じように聖なる御霊の認証を与えておられるからだ、ということができます。

そして、認証をしておられる、「あなたはわたしのものだ」と太鼓判を押しておられる人々は、災いから救われます。大患難時代の時に、神から額に印を付けられる人々がいます。14 万 4 千人の人々です。「また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。

『私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけません。』(黙示 7:2-3) 黙示録 9 章には、いなごのような存在が人々を襲い、サソリが刺すような苦痛を人々が味わいますが、「額に神の印が押されていない人間だけ害を加える」とあります(4 節)。

そしてヘブル語では、この「印」は単にヘブル語の最後のアルファベットである「タヴ」[ט]です。人々の額に「タヴ」をつけよ、と書かれています。このタヴの昔の象形文字は十字架(十)の形をしています。とても興味深いです、主イエスの十字架にある血の清めこそが、私たちが災いから守ります。

9:5 また、私が聞いていると、ほかの者たちに、こう仰せられた。「彼のあとについて町の中を行き巡って、打ち殺せ。惜しんではならない、あわれんではならない。9:6 年寄りも、若い男も、若い女も、子どもも、女たちも殺して滅ぼせ。しかし、あのしるしのついた者にはだれにも近づいてはならない。まずわたしの聖所から始めよ。」そこで、彼らは神殿の前にいた老人たちから始めた。9:7 ついで主は彼らに仰せられた。「宮を汚し、死体で庭を満たせ。さあ行け。」彼らは出て行って、町の中で打ち殺した。

この無差別殺人は歴史的に成就しました。歴代誌第二 36 章に、こう書いてあります。「そこで、主は、彼らのもとにカルデヤ人の王を攻め上らせた。彼は、剣で、彼らのうちの若い男たちを、その聖所の家の中で殺した。若い男も若い女も、年寄りも老衰の者も容赦しなかった。主は、すべての者を彼の手に渡された。(17 節)」そして、「神殿の前にいた老人たちから始めた」と言っていますが、この「老人」は「長老」と訳すことのできる言葉です。先ほどの、太陽に向かって礼拝していた 25 人の祭司たちのことです。とても大事な神の原則ですが、霊的な指導者は一番大きな責任を神の前に対して持っています。

3B 惜しみない裁き 8-11

9:8 彼らが打ち殺しているとき、私は残っていて、ひれ伏し、叫んで言った。「ああ、神、主よ。あなたはエルサレムの上にあなたの憤りを注ぎ出して、イスラエルの残りの者たちを、ことごとく滅ぼされるのでしょうか。」

主は既に、悲しんでいる者、嘆いている者の額に印を置いておられるので、確かに残りの者たちを滅ぼすことはなさいません。しかし、その女や子供をも殺していくという無差別的な裁きにおいて、エゼキエルはとてつもない衝撃を受けたようです。

9:9 すると、主は私に仰せられた。「イスラエルとユダの家の咎は非常に大きく、この国は虐殺の血で満ち、町も罪悪で満ちている。それは、彼らが、『主はこの国を見捨てられた。主は見ておられない。』と言ったからだ。9:10 だから、わたしも惜しまず、あわれまない。わたしは彼らの頭上に彼らの行ないを返す。」9:11 ちょうどそのとき、腰に筆入れをつけ、亜麻布の衣を着ているその人

が報告してこう言った。「あなたが私に命じたとおりには行ないました。」

主の言葉は、エゼキエルの執り成しによって変わることはありませんでした。必ず、彼らの虐殺に対して、虐殺をもって報いをするということを語っておられます。そして、亜麻布を来た御使いも主に命じられたことを行なって戻ってきました。主は、最も憤りを感じられたのは、彼らの神に対する無関心と不信でありました。「主はこの国を見捨てられた。主は見ておられない。」主は、私たちが何をしているか、というよりも、こうやって主を正しく見ていないこと自体を、ご自身の愛や能力、被造物に対する強い関心をないがしろにして、退けること自体に、大きな罪があるとみなしておられます。全ての行いは、この神観から出てくるからです。

エゼキエルの悩みは、全ての執り成し手の悩みです。これもまた、主ご自身の心といってもよいかもしれません。裁きを行わなければいけない主がおられます。しかし、エゼキエルと同じように、主ご自身がその義のゆえに裁きを強いられています。望んで行っておられるのではありません。そして最も大きな問題は、人の罪の深さです。エゼキエルの執り成し手としての悩みはこれです。人がここまで罪深いのか、見たくなくても見させられていく、という辛さです。まさか、人がここまで墮落しているとは思っていなかった、と思うのですが、実際に墮落していました。しかし主は、すべての人間の悪を知っておられて、なおのこと彼らを救うご計画を持っておられます。「キリストが罪人を救うために、世に来られた。」という言葉は、真実に値するのです。